

平成 28 年度(2016 年度)

日本特別活動学会 第 3 回 実践事例募集事業

推 奨 実 践 事 例

事例番号 3-5

よりよい人間関係を築くための自主的・実践的な態度を身に付けさせる学級活動の指導の工夫

東村山市立東村山第五中学校 吉 川 滋 之

実践テーマ	よりよい人間関係を築くための自主的・実践的な態度を身に付けさせる学級活動の指導の工夫
実践区分 ○ 囲み	学級活動・ホームルーム活動 児童会・生徒会活動 クラブ活動 学校行事その他(具体的に)
実践事例の 背景、ねらい、意義など	実践事例「ジグソー法を取り入れた学級活動」 1 生徒に役割と責任を与え、話し合いの結果に対する自主的・実践的な活動を促すため、指導方法の工夫として「ジグソー法」を取り入れる。 2 生徒による自己評価及び相互評価の機会を設定するとともに、教師が生徒の評価を活用することで、生徒が自信を高め、認め合うことができるようにする。 3 教師による評価の累積を行い、評価の効率化、妥当性を高める。 ・生徒に役割と責任を意識させて活動させることで自分に自信をもたせることが必要ではないか。 ・各活動の中で役割と責任が果たされれば、他の生徒から認められるとともに、互いに認め合うことができるようになるのではないかと。
実践の時期	平成 27 年 5 月 (ジグソー法を取り入れた学級活動の取組は、平成 24 年 10 月から平成 28 年 10 月にかけて、現在も継続して実践・検証を行っています。)

【実践事例】(成果と課題を含む)

1 平成 25 年度東京都教育研究員として実践の内容

平成 25 年度東京都教育研究員として、話し合い活動の工夫と認め合い活動の工夫を研究した。特に話し合い活動では「ワールド・カフェ手法(*1)の話し合い活動」を行い、小集団での話し合い活動の充実を図り、生徒が意欲的に自己決定する活動を行った。

まず、研究員の所属校で検証授業を行い、本校でも自分のクラスで「不得意教科の克服」を題材とした学級活動を行った。生徒は非常に積極的に話し合い、「またこの活動をしたいです」と感想を述べる生徒もいた。その後は当該学年全体で「合唱コンクールに向けて」「理想の上級生になるために」を題材とした学級活動を行い、生徒が自己決定したことを実践していく活動を行った。研究員の発表授業として行った「理想の上級生になるために」を題材にした授業では、他校の教員や区の指導主事も参観に来た。指導主事からは、「生徒が、小学校の頃よりもたいへん成長していて驚いた」と講評をいただいた。

2 研究員後の実践の内容

平成 26 年度も引き続き学年全体でワールド・カフェ手法の話し合い活動を行った。また、新たに平成 24 年度東京都教育研究員の報告にあった「ジグソー法(*2)」の取組を、3 月実施のスキー移動教室に向けて行った。この取組では、「スキー移動教室を大成功にするために」という題材で集団決定させ、事前の活動と実施中の活動において、生徒が自ら決めた取組を実践させ、自治的態度の育成に努めた。3 月には「ピプリオバトル」「上級生に向けて(ワールド・カフェ手法)」といった話し合い活動も実践した。

平成 27 年度は「運動会の大成功に向けて(ジグソー法)」「修学旅行の大成功に向けて(学年全体でのワールド・カフェ手法)」「生徒総会に向けた学級討議(ジグソー法)」「最高の卒業式を迎えるために(ジグソー法)」を題材にした学級活動を行った。3 年次では教師主導型の学級活動は控えるようにし、学級委員が司会進行をすべて行えるように指導した。教師は教室の隅で見守るだけであったが、生徒は活発に話し合い、学級委員は班を回りながら、適切な助言を行っていた。生徒は自分たちに任せられたことで、自信をつけていることを実感した。

3 成果

これら 3 年間にわたる取組の結果、昨年度卒業した生徒は、全員が大きく成長したことを強く感じた。1 年生の時は小学校の時の雰囲気を通り越して、私語や暴言、立ち歩きといった授業妨害とそれに対する指導無視、また、チャイム着席ができない、服装が乱れているといった規律違反があった。2 年生に進級すると、夏休み明け頃から徐々に改善されていった。特にスキー移動教室実施後は、著しく自治的態度が向上し、チャイム着席、集会時の様子、あいさつなど、最上級生にふさわしい態度へと変わっていった。生徒が「友

達の変化に置いていかれそうになった」と話すほどである。3年生になってからは1年生の時のような問題行動の報告を全く聞くことなく、1年間を終えた。

数値評価としては、1学年の時から年2回行っていた「楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U」の結果が、学級満足群は1年次5月 56.5% (学年平均) → 3年次11月 64.0% (学年平均) へと7.5%増加し、さらに要支援群の生徒数も最大5名 → 3年次11月2名へと減少した(ただし、この2名は受験期を迎え不安定になった生徒で、当初からいた5名は3年次の調査で全員要支援群の枠から外れた)。生徒の自治的な活動が深まるよう、行事ごとに学級活動での話し合いを行ってきた成果であると考え。つまり、特別活動の充実を学年全体で継続して実践することで、生徒全員の意識が変わったのだと実感した。

4 新しい学年での取組と現在の課題

今年度は、1学年主任として「生徒総会に向けた学級討議(ジグソー法)」「SNS 学校ルールづくり(生活班での話し合い)」「練馬の良いところ探し(学年全体でのワールド・カフェ手法)」「合唱コンクールに向けた意識の向上(学年全体でのワールド・カフェ手法)」「いじめ防止に向けた活動(コの字型での話し合い)」「理想の上級生になるために(学級でのワールド・カフェ手法)」を題材にした学級活動を行った。

特に、「SNS 学校ルールづくり」は学校全体で取り組み、全ての学級で話し合い活動が充実するようにした。事前の活動として、教員と生徒会本部の打ち合わせを綿密に行った。そして、生徒会本部から学級委員へ事前指導、学級委員から班長への事前指導を行い、生徒主導型の活動を行った。当日も学級委員が司会進行を行い、教員はできるだけ助言をしないようにした。活動後、他学年の教員から、「学級委員がとても良い表情で取り組んでいた。他にも同様の取組はありますか」と特別活動の資料を求められた。生徒主導型の活動を行うことで、生徒の新たな一面を発見でき、教員の意識が変化したものと考えられる。このような活動を今後も行い、学校全体で生徒の自治的能力の向上と、教員の特別活動に対する意識の向上を努めていく。

課題は、「コの字型での話し合い」の活性化である。小集団では話し合いを活発に行うが、コの字型になると意見を述べる生徒がかなり減っている。コの字型での話し合いをたくさんこなしていないためと思われるが、今後は繰り返し「コの字型での話し合い」を行い、学級全体への発言ができる生徒の育成と、発言を受け止める仲間づくりを行い、自治的活動がさらに深まるようにする。

○ 注釈

*1 ワールド・カフェ…1995年、アニータ・ブラウン氏とデイビッド・アイザックス氏によって開発・提唱された対話の手法。本物のカフェのようにリラックスした雰囲気の中で、テーマに集中した対話を行う。メンバーの組み合わせを変えながら、4

～5人単位の小グループで話し合いを続けることにより、あたかも参加者全員が話し合っているような効果が得られる。なお、本来のワールド・カフェは90分以上かけて行うので、ここでは「ワールド・カフェ手法」として扱う。

*2 ジグソー法…アメリカの社会心理学者エリオット・アロンソンらが提唱した学習スタイルで、共同学習を促すために編み出された方法である。例えば、1つの長い文章をいくつかの部分に分け、グループ内で分担して勉強する。そしてそれを持ち寄って、お互いに自分が勉強したところを紹介しあい、ジグソーパズルを解くように全体像を協力して浮かび上がらせる。

○ 資料

・参考文献

「ワールド・カフェ～カフェ的会話が未来を創る～」 出版社 ヒューマンバリュー
著 アニータ・ブラウン、デイビッド・アイザックス 訳 香取一昭、川口大輔
「ワールド・カフェをやろう！」 出版社 日本経済新聞出版社
著 香取一昭、大川恒